

## 南禅寺大寧軒

京都造形芸術大学大学院客員教授  
植彌加藤造園株式会社代表取締役社長  
加藤 友規

### 1. 南禅寺大寧軒の概要と変遷

江戸時代の南禅寺は徳川幕府の加護にあった。中興開山として仰がれる第270世、以心崇伝（永禄12年・1569～寛永10年・1633）の活躍以来250年間、経済的基盤である寺領約20万坪を安堵されてきた南禅寺であったが、明治4年（1871）、明治政府は社寺領の上知を命じたため南禅寺は現在の境内地約6万坪を除くすべての寺領を失うに至った。明治3年（1870）時点では27院存在した塔頭のうち、明治末までに17院が姿を消してしまった。平成29年現在、南禅寺には12の塔頭が存在する。南陽院は明治41年に建立、大正6年には上生院旧地に高德庵（現最勝院）が移設された。正因庵は明治43年、天授庵の東の現在地に移転している<sup>1)</sup>。ここでは、旧境内地及び旧塔頭跡地と、平成29年現在の南禅寺界限別荘庭園群の位置とを整理する（図-1、図-2）。

大寧軒は、平成15年3月に民間企業の迎賓施設であった当地を南禅寺が買収して現在に至るが、旧塔頭跡地に建立された別荘を南禅寺が買い戻した唯一の事例ともいえる。この地が江戸時代の塔頭の一つである大寧院の跡地に位置することから、大寧軒と名付けられたことはいうまでもない。名称は、明治期の作庭当初から環翠園（環翠庵）と呼ばれていたが、昭和59年、株式会社じゅらく工芸織により聚洸苑、平成15年には南禅寺により大寧軒と改名されている。

江戸時代、塔頭大寧院に庭園があったかどうかは定かではない。『京都坊目誌』（大正5年（1916）刊）では、明治20年に廃寺となった大寧院の跡地を呉竹彌太郎が購入し、琵琶湖疏水の水を引いて作庭を行い、原彌兵衛の所有（明治39年・1906）後、さらに庭園の大改修が行われ、環翠園と命名されたとあるが、『京華林泉帖』（明治42年（1909）刊）では、琵琶湖疏水の水を引いて作庭を行ったのは原彌兵衛の所有以降としており、記述に食い違いが見られる<sup>2)</sup>。ただし、両書とも、作庭に藪内宗匠（11代目透月斎竹窓）が関わった点は一致しており、明治期に作庭されたということは間違いのないと思われる。

大正期以降、庭園を含めた邸宅の様子の変遷をうかがわせる資料が確認されておらず、その後の変遷は不明な点も多い。『京華林泉帖』掲載の写真に石造りの三鳥居



写真-1 『京華林泉帖』（明治42年）に掲載されている「環翠園林泉」

の姿がないのも興味深い（写真1）。大正から昭和前半にかけて当地の庭園管理を勤めた藤江半次郎<sup>3)</sup>から加藤次郎<sup>4)</sup>へ管理が移管されたのが昭和22年のことであるが、昭和25年（1950）に当地を取得した稲畑太郎の元でも庭園管理を継続していた加藤次郎の証言によると、当時既に三鳥居は存在していたとのこと。

昭和52年（1977）に三越が所有すると同時に、建物が改築され、あわせて加藤彌寿雄<sup>5)</sup>による主屋周辺の修景工事が行われた<sup>6)</sup>。明治期からの旧建物に関しては、旧主屋（東側）と付属の旧居宅（西側）が新主屋1棟に改築されたが、旧主屋の南側軒先のライン、根府川石や鞍馬石の沓脱石は現状のままで、庭の修景がされている（図3、図4）。

更に、この時期に改修された以下の①～⑥の箇所を図3及び図4にて表示した<sup>7)</sup>。

- |                      |                    |
|----------------------|--------------------|
| ① 玄関前庭北側の降り蹲（貴船石）の新設 | ② 玄関前庭南側の暗渠を開渠に修景  |
| ③ 主屋玄関入口の延段（丹楓石）の拡幅  | ④ 井筒を庭園西端から主屋南側へ移設 |
| ⑤ 茶室環翠庵の増改築          | ⑥ 南西部の畑・竹藪箇所の東屋の新設 |

環翠庵は、落ち着いた風情を醸し出しながら、繊細にして渋い技巧を見せた庭園として大寧軒となった現在も南禅寺の迎賓施設として利用されている。

## 2. 水系利用について

琵琶湖疏水の水は、和楽庵（現何有荘）の丘上にある発電所取入口から大寧軒南側先端の滝で直接一次利用として取り入れている。滝から流れを配し、沢飛石と石造三鳥居を経て優雅な曲線を持つ池に水が注がれている。更に池から北行きの細い流れを経て玄関先の水景に至る。

琵琶湖疏水の水利権については、大正中頃までは、和楽庵も含め、環翠庵付近の水利権は河本喜兵衛の手にあり、「飲料並用水用」としての水を庭園に転用する形で利用していたと考えられる。環翠庵においては、大正9年（1920）に七代目小川治兵衛が代理人となって、正式に水利権を取得している<sup>8)</sup>。ここでは、水利権を取得している庭園と、そこから排水された水を二次利用している庭園とを図5に明示した。無鄰菴をはじめ大寧軒や智水庵や何有荘など、明治期に作庭された庭園への導水を担っている疏水船溜系と発電所取入口系においては、對龍山荘のように二次利用の庭園がみられるのに対して、開発が北部に展開された大正期以降に作庭された碧雲荘、清流亭、流響院などの庭園へ導水する扇ダム系においては、二次利用の庭園が見られないのが特徴といえる。

## 3. 根府川石について

大寧軒の主屋東南側の沓脱石に根府川石が用いられていることは特筆しておきたい。根府川石については、高橋義雄（箒庵）が『我楽多籠』（大正3年（1914）刊）で、東京で嫌われるが関西では珍重されると評している<sup>9)</sup>ように、京都では江戸時代から珍重されていたようである。江戸時代前期の資料を見ると、『茶譜』（寛文（1661～1673）頃に完成か）には古田織部や小堀遠州が露地に根府川石を用いたこと、俳諧の指南書である『毛吹草』（正保2年（1645）刊）には相模の名産品として根府川石が著名であったことが記されている。一方、関東地方から関西に石を運ぶことは容易ではなかったようで、江戸時代中頃に記された『和漢三才図会』（正徳2年（1712）自序）では、京都では非常に高価な石として紹介されている<sup>10)</sup>。

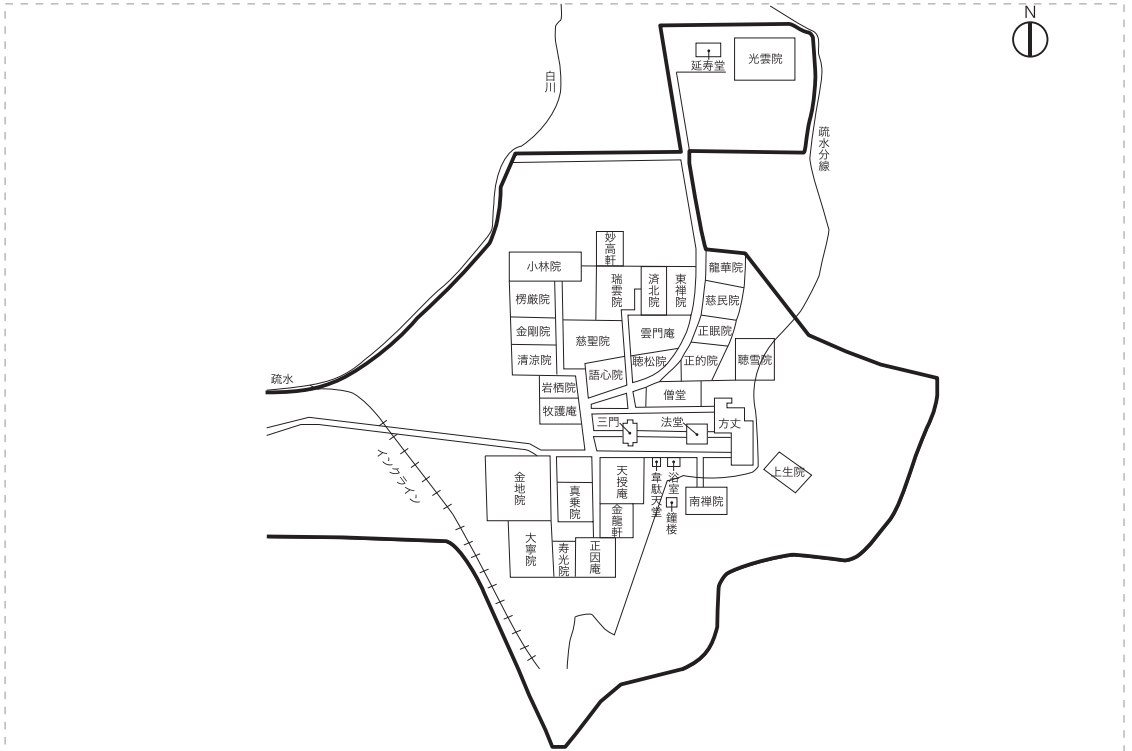


図1 旧南禅寺境内の塔頭配置（上知令以前）（出典：『南禅寺史』附図「江戸中期南禅寺塔頭配置図」）

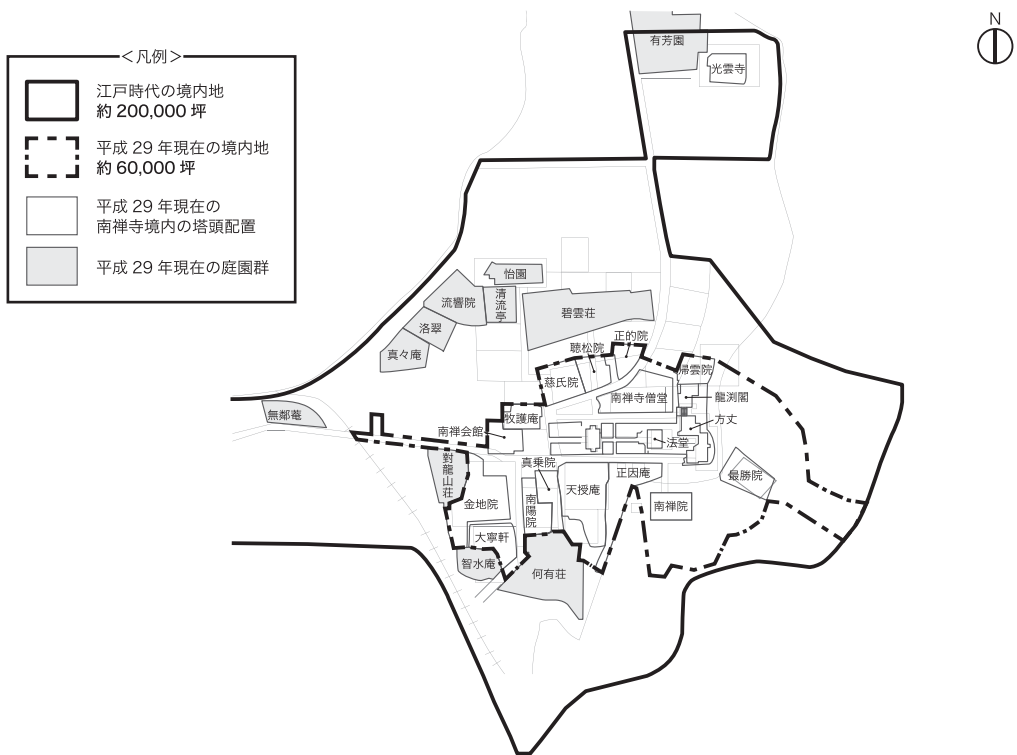


図2 平成29年現在 南禅寺境内の塔頭配置及び庭園群（『南禅寺史』附図「江戸中期南禅寺塔頭配置図」を参考として作成）

図3 環翠庵平面図  
昭和52年(1977)改築前

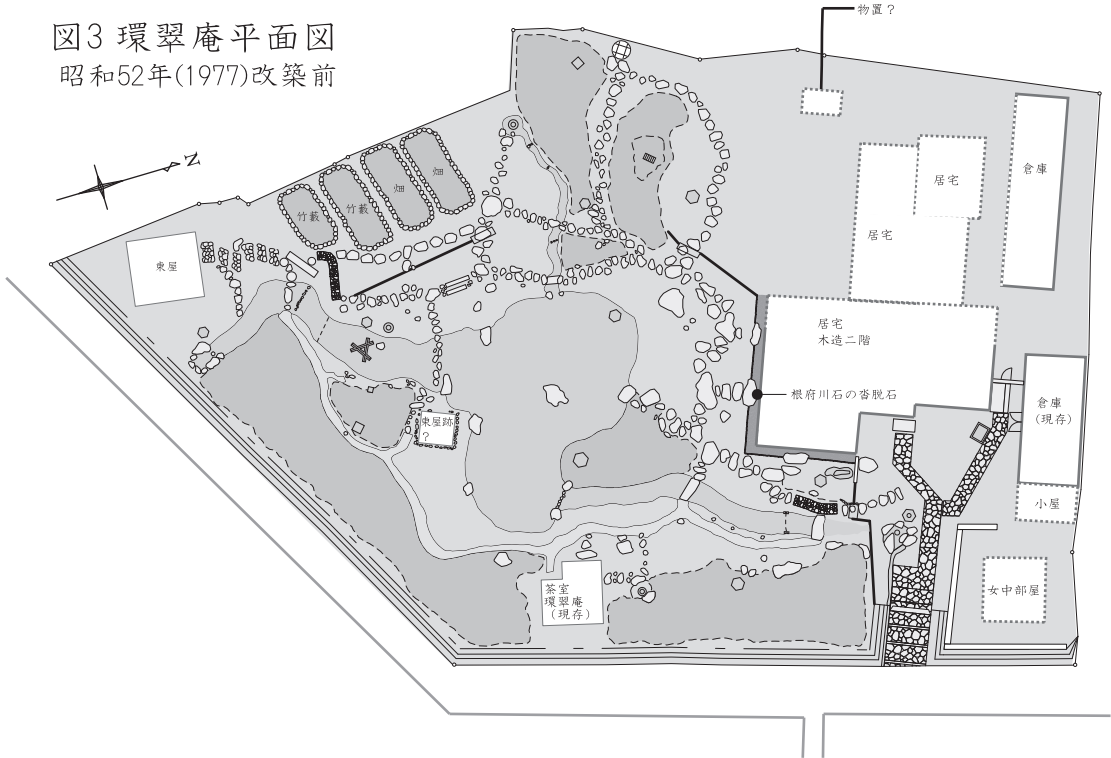


図4 大寧軒平面図  
平成29年(2017)現在

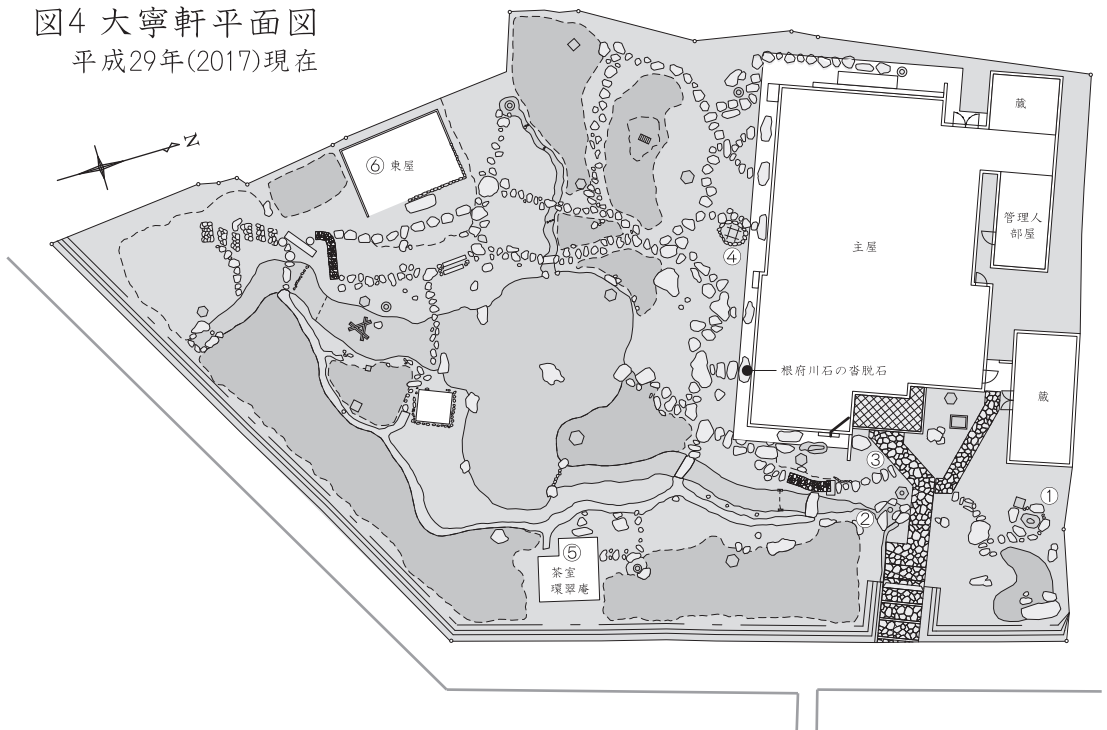




図5 南禅寺界隈排水園池群の水系における水利権の利用状況

図版「南禅寺界隈排水園池群の水系」より加筆修正 (出典：尼崎博正著『七代目小川治兵衛』P.15 ミネルヴァ書房 2012)

2) 藤江洋次郎は、七代目小川治兵衛のもと植治の番頭を勤めた人物で、加藤次郎の叔父にあたる。山根徳太郎『小川治兵衛』(昭和40年・1965)巻末の集合写真に掲載されている。

4) 加藤次郎：明治45年(昭和63年・1912~1988)植彌加藤造園5代目当主。南禅寺小方丈庭園などを作庭。

5) 加藤壽壽齋：昭和5年(平成15年・1936年)植彌加藤造園6代目当主。南禅寺華嚴庭などを作庭。

6) 三越時代の建物改築前後の変遷については、京都地方法務局所蔵の建物登記簿(閉鎖)、ならびに国土地理院の建物登記簿を見ることができるとなっている。

と根府川石が使われることになったが、根府川石は飛石としての用途を見込んで運んだようでサイズは大きいものが多く、100個程運ばれた石のうち、実際に使われたのは6割ほどで、残りは「二条之川原」に置かれることになったと記録にある<sup>11)</sup>。使わなかった石がどうなったかは記録が確認されていないが、皇族や公家・武將たちが御所で眺めるとのは別に、東国から運ばれた珍しい石を民衆たちが眺める機会ができたことも、根府川石の名を京都に広めることになったのかもしれない。

根府川石で特に、興味深い逸話として、燕庵の「三ツ小袖石」<sup>12)</sup>がある。天明7年(1787)刊行『拾遺都名所図会』内の「古田織部京座舗」の項には、「三ツ小袖といふ名の石は鼻祖劍仲千利休に小袖三ツと代られけるとかや」と記されている<sup>13)</sup>。初代藪内劍仲紹智が、親交の深かった兄弟子千利休の屋敷にあった根府川石を所望し、小袖三つと交換して燕庵中露地の飛石の踏分石に再利用したという伝説である。更に、同項添付の「藪内茶亭庭中之圖」には燕庵の様子と共に「三ツ小袖石」が鮮明に描かれている。ここで、大寧軒主屋東南側の沓脱石を思い出してもらいたい。ここに敢えて根府川石が使用されているのはどういうわけであろうか。前述のとおり、『京華林泉帖』や『京都坊目誌』には、作庭に七代目小川治兵衛の名は無く、藪内紹智透月齋竹窓が作庭に関わった旨が記されている。それ故に、藪内11代目の透月齋竹窓が初代劍仲紹智の好んだ根府川石を意識的に採用したと考えることもできる。あくまで推測の域をでない仮説ではあるが、大判の鞍馬石をふんだんに取り入れた沓脱石や飛石の中に、根府川石をさりげなく用いているところは透月齋竹窓ならではの、譲れないこだわりなのかもしれない。この根府川石の沓脱石は、先述のとおり、昭和52年(1977)の三越所有時の主屋改築の際にも旧態を保ち、大寧軒となった今日も、環翠庵の往時の姿と変わらず佇んでいる。

## 補注及び引用文献

1) 尼崎博正「植治の作庭活動」『庭石と水の由来』第5章 263頁 昭和堂 2002

2) 『京都坊目誌』(大正5年(1916)刊)

又東方金地院の南。旧大寧院址に原彌兵衛所有の別荘あり。明治二十年。廢院後荒地と為る。京人呉竹彌太郎之を購ひ。疏水を引き石を疊む。近年原氏の有と為り。藪内宗匠をして大に修補を加へ。閑雅の林泉と為る。妙心寺僧薩水来り賞し。環翠園と命名す。

『京華林泉帖』(明治42年(1909)刊)「環翠園林泉」

南禅寺東照宮の南東に在り旧と呉竹別荘と称し金地院に付属す慶長年間建築せし時の棟札を伝へたり近年大阪原氏買得し大に改築を加ふ其林泉は家の南に在り羊角嶺を東に望み東照宮の森を西北に控へ疏水を引き瀧となし池となり溪となり北に下る茶室を南の林中に築く藪内宗匠の考案に成れり書院に松翁の書水秀山明の四字額を掲ぐ

- 3) 藤江半次郎は、七代目小川治兵衛のもと植治の番頭を勤めた人物で、加藤次郎の叔父にあたる。山根徳太郎『小川治兵衛』（昭和40年・1965）巻末の集合写真に掲載されている。
- 4) 加藤次郎：明治45年～昭和63年・1912～1988 植彌加藤造園5代目当主。南禅寺小方丈庭園などを作庭。
- 5) 加藤彌寿雄：昭和11年～平成15年・1936～2003 植彌加藤造園6代目当主。南禅寺華厳庭などを作庭。
- 6) 三越時代の建物改築前後の変遷については、京都地方法務局所蔵の建物登記簿（閉鎖）、ならびに国土地理院ホームページ中、地図・空中写真閲覧サービス（<http://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do#1>）を閲覧した、昭和49年（1974）と平成20年（2008）の航空写真を参照にしつつ、加藤彌寿男氏とともに庭の修景工事に携わった加藤末男氏より当時の様子を聞き取った上で整理し、図-3ならびに図-4を作成した。なお、茶室環翠庵については、建物登記簿（閉鎖）では昭和53年（1978）2月28日に変更・増築の登記がなされているが、改築前から現況の状態であったとの加藤末男氏の証言がある。おそらく、昭和53年以前に増築されたものの登記の変更がなされず、他の建物の改築にあわせて登記したものと思われる。

『庭別冊18』P34-36、P115-117 1981

小野芳朗『水系都市京都—水インフラと都市拡張— 思文閣出版 2015

高橋義雄（箒庵）『我楽多籠』（大正3年（1914）刊）には、「東京には根府川石と申して薄い板に裂かれて面のつるゝするのがありますが、東京で嫌がらるゝ反対に關西で珍重さるゝのは、兎角物は少きに依つて貴い一例であります」と、根府川石の京都での希少価値に言及している。

『淡交52（4）』より尼崎博正「露地にみる素材と表現4 根府川石」（1998）、尼崎博正『庭石と水の由来』（2002）、堀口捨巳『茶室研究』（1969・1990再版）など。

『高槻市史』4（1）（昭和49年・1974）所収「永井家文書」中の以下の文書の中に、根府川石についての記載がみられる。いずれも明暦元年（1655）の書状である。

- 9月9日付け、157「酒井忠勝書状」〔16-13〕
- 10月26日付け、159「江戸幕府老中連署状」〔5-8〕
- 11月8日付け、161「酒井忠勝書状」〔5-10〕
- 11月16日付け、162「酒井忠勝書状」〔5-11〕
- 11月25日付け、163「酒井忠勝書状」〔16-14〕
- 12月7日付け、164「酒井忠勝書状」〔5-12〕

「古田織部京座舗」の全文は以下の通り。

西洞院北小路藪内の茶亭なり、織部命終の剋此家に譲り給ふ、茶亭の軒に燕庵といふ額あり、珠光庵の筆なり。雪のあしたといふ石灯炉は東山殿の持物とかや、あるひは利休の寄とうろ戸下といふ庭石、三つ小袖といふ名の石は鼻祖劍仲千利休に小袖三つと代られけるとかや、其外八坂法観寺の礎、文覚石等は庭中の手洗鉢とす、熱田金灯笼の名器、さまざま、庭中に見へたり



『拾遺都名所図会』（天明7年・1787）所収の絵図